

学問のすすめ

2023. 1. 30

人の寿命が80年を超え、「人生百年」という言葉が使われるようになってきた。20世紀後半までは、人は定年後、10年から15年くらいがせいぜいと考えてきた。100年もの人生を与えられたら、生涯をどのように働き、健全に生きてらよいかわからなくなる。

古来、国家百年の計という言葉がある。国の隆興を実現するための遠大な国策のことである。人の寿命百年が現実味を帯びて目前に迫ってきた今、国家百年の計と人生百年、終身の計が重なってくる。これはかつてない出来事であろう。

一方、私たちの生活の糧を得る手段である仕事・職業の寿命はどんどん短くなっている。情報技術IT、人工知能AI、ロボット、これらを総合したデジタルトランスフォーメーションDXが、あらゆる職域、社会システムに入ってきて、人の働き方に大変革をもたらしつつあり、その加速度を増している。

ドラッカーは、20世紀末に近未来の21世紀を予測して次のように言っている。「21世紀に重要視される唯一のスキルは、新しいことを学ぶスキルである。それ以外はすべて時間と共に廃れていく」慧眼である。今、私たちが携わっている仕事、業務は、10～20年後には消滅している確率が高く、この言葉に納得せざるを得ない状況になっている。

ドラッカーの研究の基本的関心事は、人を幸せにすることにある。その主張は、組織の中の人間という観点から論じている場合が多い。新しいことを学ぶスキルは、一人一人が独立自尊の心で、忍耐力をもって継続的に学ぶ努力を言っている。

日本には、福沢諭吉がいる。「学問のすすめ」である。明治維新の文明開化に際し、欧米の新しい実学（スキル）を習得することが国の発展、人生の成功につながると説いた。当時、340万部売れ、国民の10人に1人以上の割合で読まれた空前の大ベストセラーである。その主張の本質は、ドラッカーと似ている。

世の中の変化には、なかなかついていけなくなっている。自分が生きている間に、自動運転の車が出てくるとは思わなかった。最近の車は、駐車場に止めるのに何もしなくてもよいらしい。携帯電話が出てきて、わずかな時間でスマートフォンを当たり前を持つようになると思わなかった。テレビも地上波以外の方がおもしろくなると思わなかった。

人の寿命が100年に伸びても、社会の変革がいかに激しくなっても、ドラッカーや福沢諭吉をはじめとする幾多の先哲が一樣に説いた学ぶことの重要性、学問のすすめは、国に対しても、個人に対しても重要なことである。

新しいことを学ぶのに、学問をするのに年齢は関係ない。これからが大切である。そう肝に銘じ、学び続けていきたい。